

郷土雑誌『宗像』について

はじめに―宗像会と『宗像』の紹介⁽¹⁾

一八九一（明治二十四）年、東京に在住する宗像郡出身の学生により「宗像郷友会」が結成され、『郷友雑誌』を創刊した。雑誌の題字は、幕末に活躍した郷土の志士、早川勇（一八三二―一九九）の揮毫による。⁽²⁾

一八九七年に、「宗像郷友会」は「宗像会」となり、『郷友雑誌』は『宗像』に改称している。その後、『宗像』は戦時中から休刊したあと、新たな発行者のもとで再刊したが、一九六八（昭和四十三）年に宗像大社発行の社報『宗像』へ合流し、約八十年の歴史を閉じている。総じて、『宗像』は戦前に一六三号、戦後に二二二号、計一八五号の発行を確認している。なお、宗像会の会員数は、『宗像』各号の会員名簿によると、次のとおりである。

一八九一年 一九六八人（第一号）
一九〇三年 五一〇人（第五二号）
一九一三年 八一五人（第九五号）
一九二五年 一二〇四人（第一三五号）
一九三七年 八四三人（第一四六号）
一九六三年 七八六人（再興第二号）

この『宗像』は、宗像郡出身者たちの連絡帳のような役割をもつ

時里奉明・渡辺みか・三角徳子

た郷土雑誌といつてよい。「会員消息」欄は、東京、地方、郡地、海外に分かれていて、国内外の宗像郡出身者を結んでいた。雑誌そのものは、「論説」「雑事」「文苑」などの欄を持ち、会員の投稿で成り立っている。会員名簿は、著名な実業家、官僚、学者、教育者の名前を確認することができる。たとえば、出光興産を創業した出光佐三（宗像郡赤間村出身）は一九〇四年以来の会員であり、『宗像』にいくつも投稿している。

以下、宗像会と『宗像』について、Ⅰ『宗像』の創刊から終刊まで（時里奉明）、Ⅱ戦前の『宗像』（渡辺みか）、Ⅲ戦後の『宗像』（三角徳子）、と分担して説明する。

Ⅰ 『宗像』の創刊から終刊まで

一・『郷友雑誌』の創刊 一八九一―一九七年

宗像会は帝国大学の学生であった吉田良春の働きかけにより成立した。一八九一（明治二十四）年七月六日、吉田は宗像東部の教員教育会に出席し、雑誌発行の賛意を得ると同時に、宗像郡教育支部会に参加するよう勧められた。吉田はおそらく、夏休みになって、故郷に帰っていたのであろう。七月九日、吉田は宗像郡教育支部会副会長である井上近蔵（東郷高等小学校長）を訪れている。井上は

「本郡ノ子弟二大功アルヲ以テ十分ニ尽力セン」と同意し、さらに「高等小学卒業生ノ同窓会設立ノ計画アルヲ以テ、設立ノ上ハ同会員ヲモ同雑誌ニ賛成スルモノ多カルヘシ、予ハ同会ニ向テ此挙ヲ勧誘スヘシ」と後押ししている。続いて吉田は、同会会長の宮本貞潔（宗像郡長）を訪問している。宮本は吉田が教育支部会で説明することを許可したうえ、村長会で勧誘することを約束した。七月十一日、吉田は教育支部会に出席し、雑誌発行を説いたところ、七三人が賛成した。さらに吉田は、七月中に宗像郡の県会議員である石松要一・占部要蔵・深川栄次郎、元県会議員平田道見の賛成をとりつけている。八月に入って、村長組合議員二人、高等小学校卒業生同窓会員三八人が雑誌発行に賛成を表明している。こうして、吉田は、まず宗像郡教育界の有力者、次に宗像郡行政の指導者の協力を獲得することに成功し、東京に戻ったあと、九月末に創刊号を発行することを明らかにしている。⁽³⁾ここで、吉田良春の履歴を紹介しておこう。

一八六六（慶応二）年赤間村陵巖寺生まれ。修猷館、第一高等中学校、帝国大学へ進学。一八九三（明治二十六）年高知県尋常中学校教諭、九六年静岡岡県中学校長、九八年山口高等学校教授兼教頭、一九〇〇年住友別子鉱業所経理課主任、〇六年住友若松炭業所支配人、のちに住友炭業所所長 筑豊鉱業組合常議員、若松石炭同業組合長、若松市教育会長、若松築港会社取締役⁽⁴⁾

吉田はエリートの道を進み、当初は教員職に就くが、三十歳代半ばで実業界に転じ、おもに若松の財界や教育界の要職を歴任した人

物であった。

吉田は東京に戻って、宗像郡出身の在京学生を中心に「宗像郷友会」を組織し、一八九一年十一月に雑誌『郷友雑誌』を発行した。吉田の予定より、二カ月遅れであつた。

雑誌発行の目的は「郷友ノ交誼ヲ厚フシ、智識ヲ交換シ、徳行ヲ奨励シ、老幼少長各其責任ヲ尽シ以テ本郡ノ福利ヲ増進スル」ことにある。会員は、「宗像人又ハ本郡ニ縁故アル者」に限定していた。宗像人は、宗像郡出身者をさしている。会費は年六〇銭（半年毎に三〇銭徴収）、雑誌発行は年六回（奇数月）であつた。幹事二人で、雑誌の編集、会計の管理、その他すべての事務を行うことになつていた。第一号の会員名簿によると、会員数は一九六人であつた。⁽⁵⁾

創刊から間もない一八九四年、雑誌発行は年六回から年四回とし、翌年度の会費を前年に納めることにした。⁽⁶⁾本会は発会してほどなく慢性的な資金不足に悩まされるようになり、誌面上で頻繁に会費納入を呼びかけるようになる。

二．『郷友雑誌』から『宗像』へ 一八九八—一九二二年

一八九八（明治三十一）年八月十日、宗像で夏期集会（参加者六五人）を開催し、「宗像郷友会」を「宗像会」へ変更し、雑誌名も



吉田良春
（第100号 1915年 11月）

『宗像』へ改題することになった。その際、雑誌の号数は引き継いでいる。⁷⁾ 一九〇三年ごろ、幹事の河邊稔により、雑誌名を『宗像雑誌』と改め、年六回発行や評議員制導入が提議されている。河邊は本会創立以降、会員は三〇〇人以上増えて五五〇人に達したので、この規模に応じた運営のあり方を提案したと説明している。しかし、この案は実現していない。⁸⁾

一九〇四年十一月、宗像郡出身の在京学生を対象とする下宿「宗像会本部」が成立している。のちの「宗像塾」である。この宗像会本部と密接に関係していたのが、「浩々居」という下宿であった。平田知夫（池野村出身）は、一八九八年に修猷館を卒業、上京して第一高等学校に入学した。平田は同じく一高に入学した広田弘毅ら六人とともに、小石川区戸崎町（文京区白山）に家を借りて共同生活を始めている。その下宿が「浩々居」である。下宿の名前は、馬子才の歌「浩々として歌う、天地万物吾を如何せん」に由来する。入居者は旧筑前国出身者を対象としたようである。広田弘毅は周知の通り、後年首相となる人物であった。平田は修猷館で広田と親しい仲となり、一高、東大とともに歩み、同期で外務省入りすることになる。平田知夫の略歴をあげておく。



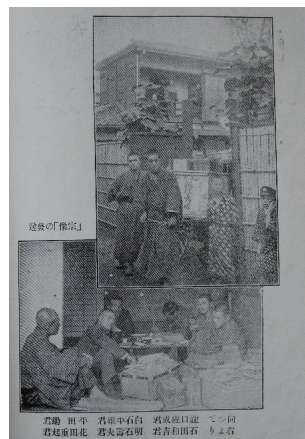
平田知夫（第100号）

一八八〇（明治十三）年池野村田野生まれ。
一八九三年修猷館入学、
九八年第一高等学校入学、
一九〇一年東京帝国

大学入学、〇五年インド領事官補、一二年山座円次郎の義妹と結婚、オーストラリア大使館三等書記官、一四（大正三）年ロシア総領事代理、一七年病で帰国、一八年四月十五日死去（三十九歳）⁹⁾

そのうち、浩々居は手狭になり、入居できなくなった。そこで、東京外国語学校に在学していた瀧口亮造（徳重村出身）が平田と相談し、小石川区白山御殿町に家を借りて発足したのが「宗像会本部」である。一九〇四年十一月であった。この宗像会本部は、一九一〇年夏ごろに一旦解散するが、同年末に再興して「宗像塾」と名乗るようになったという。一九一三（大正二）年度から宗像郡会より宗像塾に二四〇円、宗像会に三〇円の補助が出るようになった。宗像会本部の創立当初から、借家の敷金に苦しみ、宗像塾生はしばしば宗像郡の有力者に経済的な支援を要望していた。この宗像塾生により、『宗像』の編集・発行を行っている。なお、宗像塾は一九〇四年から四一（昭和十六）年まで三七年間続いている。¹⁰⁾

このあと、一九一二年に会員を四種（名誉会員、終身会員、特別会員、普通会員）とし、一六年に寄付金を募集している。また一九二二年、会費の徴収に集金郵便を導入している。この制度により、郵便局は幹事から委託されて、会員から会費（現金）を取り立てることになった。¹²⁾ 依然とし



『宗像』の編集と発送の様子（第100号）

て、会費未納者に苦勞していたのであろう。

三、『宗像』発行の危機 一九二三―三五年

宗像会および宗像塾の転機となったのが、一九二三（大正十二）年九月一日に起こった関東大震災である。この大震災は、『宗像』の発行に大きな影響を与えた。

宗像塾の建物は震災で被災し、宗像塾生はそれぞれ下宿住まいとなつてバラバラになつてしまふ。また一九二三年の郡制廃止により、宗像郡教育会からの寄付は途絶えた。当時の幹事は郡制廃止にあたり、自前の「東京宗像会本部」建設を呼びかけ、寄付金を募集していたが、目標額に届かないばかりか、大震災により断念せざるをえなくなった。

大震災の四ヵ月後、一九二三（大正十二）年十二月に『宗像』第一三四号を発行している。これまではタイプ印刷であつたが、今回はガリ版印刷であつた。その誌面で、宗像会本部を宗像中学校へ移し、雑誌を発行することを提案している。宗像中学校は一九一九年四月に開校していた。⁽¹³⁾

宗像会本部を宗像中学校に移し『宗像』第一三五号を発行したのは、一九二五年八月であつた。その後、一九二八（昭和三）年まで発行を続けているが、



第134号の表紙
(第135号になっている
が誤りと思われる)

翌二九年から三〇年まで途絶えている。一九三一年から、宗像会本部を再び東京の宗像塾に戻し、雑誌の発行を再開した。⁽¹⁴⁾

四、『宗像』の転換と休刊 一九三六―四三年

一九三六（昭和十）年から三七年にかけて、宗像会と『宗像』の性格は大きく変容する。一九三六年八月三日、宗像会と宗像神社の関係者が協議し、『宗像』（宗像会発行）と『神光』（宗像神社発行）を合同して、『宗像』に一本化している。『神光』は宗像神社崇敬社の機関誌として、一九二七年八月に創刊した。この崇敬講社は一九一九（大正八）年六月、宗像神社三宮（沖津宮・中津宮・辺津宮）の崇敬者を結集し、「報本半始」（天地や祖先などの恩に報いること）の大義を報じて、神徳を欽仰することを目的に、宮司を崇敬講社長として発足している。『神光』は氏子崇敬者に毎月配布していたが、経営不振に陥っていた。⁽¹⁵⁾

こうして、宗像会の目的は「宗像神社ノ御神徳ヲ敬仰シ御神威ヲ発揚シ併セテ氏子並ニ崇敬者相互ノ連絡ヲ計ル」ことになり、本部を宗像神社社務所に置いた。会員は「宗像神社ノ氏子及宗像郡出身並ニ宗像神社ト特別ノ関係ヲ有スル者」となっている。役員に評議員、幹事、委員を置き、宗像神社の宮司が評議員の中心となつて運営する体制になつていく。⁽¹⁶⁾ 宗像会は、宗像郡出身者同士の連絡を残しつつ、宗像神社信仰を基盤として、新たに編成されたといつてよい。

一九四二（昭和十七）年八月九日、総会を開催し、『宗像』の発行を年二回に変更した。一九四一年十二月に太平洋戦争が始まり、

国民の精神も生活も戦時一色になっていく。その後、戦局の悪化にともない雑誌発行は遅延し、一九四三年八月に第一六三号を出して自然休刊となっている。⁽¹⁷⁾

五、『宗像』の再刊から終刊まで 一九五五―六八年

一九五五（昭和三十）年十二月、中野正之を主幹として、宗像会を復興し、『宗像』を復刊した。復刊『宗像』第一号の趣旨によると、一八九一年の宗像会発会の目的を改めて確認し、再びスタートすることになっている。復刊『宗像』の題字は、旧『宗像』を踏襲している。ただし、復刊『宗像』は一九五七年一月発行の第三号で休刊している。⁽¹⁸⁾

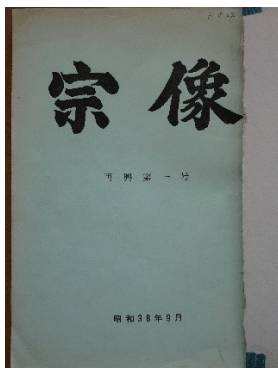
宗像会の本格的な再興を手がけたのは、元津屋崎町長の永島計七であった。一九六二年十月十日、永島は宗像会の「趣意書・会則（案）」を作成し、郡町村長会・同議長会の合同会議に出席し、協力を求めている。十月二十二日、町村長会長は四団体（郡町村長会、温故会〔郡内旧町村長会〕、榑実会〔郡内旧学校長会〕、地教委協議会〔郡内各町村教育委員会連絡協議会〕）の各代表者を召集し、発起人の母体となること、世話人として宗像会を結成することを要請し、承諾を得ている。

この動きと合わせて、県内各地の宗像会（福岡、八幡、飯塚）と連絡をはかった。永島と安部徹太郎の両人は十一月上旬に上京、出光佐三、倉田主税、出光泰亮、出光万兵衛、安永渡平らと面会し、発起人を依頼している。世話人から選出された結成準備委員九人（高橋盛平、力丸健象、井上陽之助、立石昇、永島計七、伊東昇

平、安部徹太郎、古野久喜、横山茂樹）は、郡内の各団体、各校区代表者に協力を求めつつ、大阪、福岡、八幡、飯塚の有志に発起人を依頼している。こうして一九六三年一月二十八日、発起人会を開き、趣意書・会則を決定している。結成総会は三月八日に東郷小学校講堂で開催した。再興『宗像』第一号は、一九六三年九月に発行している。⁽¹⁹⁾

再興した宗像会の目的は、「会員相互の親交を厚うし、時代の進展に即応した本郡の振興発展を期し郡民の醇風美俗を助長する」こととであり、宗像郡町村長会に本部、各町村および職域地域などに支部を置いた。会員は「本会の主旨目的に賛同する者」とし、普通会員と賛助会員の二種になっている。役員は会長、副会長、理事、評議員、監事で構成されている。評議員は各支部より選出し、会長以下で役員は評議員会で選任または推挙された。会長は会務を総理し、総会役員会、総会を開催する権限を持っている。再興『宗像』の発行は、目的を達成する十一の事業の一つとなり、発行回数定めなどはなかった。⁽²⁰⁾戦前と比較すると、雑誌の比重は低下していることがわかる。

再興『宗像』は、一九六八年七月発行の第一九号で終わっている。同年十月二十六日の総会において、「財政硬直化の打開と若返りを画して」、再興『宗像』は宗像大社発行の社報『宗像』へ合併することになった。



再興第1号の表紙

これにともない、本部は宗像郡町村長会から宗像大社社務所へ移っている。社報『宗像』は、第九六号（一九六八年十二月一日）から発行所を「宗像大社・宗像会」と共同名義とし、宗像会会員に社報『宗像』を配布することにした。社報『宗像』は、一九六一年一月に創刊（月刊）し、再興『宗像』を合併して、今日まで続いている。⁽²¹⁾

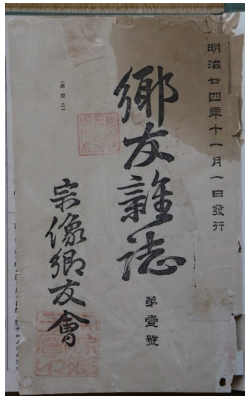
Ⅱ 戦前の『宗像』

Ⅱは、戦前の『宗像』（第一号～第一六三号）について、「創刊号」、刊行の節目となる「第五〇号」「第一〇〇号」、創立五〇年記念号となる「第一六〇号」、そして戦前最後の発行となる「第一六三号」を対象とし、雑誌の構成や掲載記事の内容を中心に紹介したい。

また、Ⅱの末には、花田勝広氏らが作成した資料をもとに、新修宗像市史編さん事務局と時里、三角、渡辺が実施した調査によって判明した『宗像』第一号～第一六三号の原本所蔵場所一覧を掲載する。

一、創刊号「第一号」

『宗像』の第一号は、一八九一（明治二十四）年十一月一日、「郷友雑誌」という雑誌名で発行された。第一号の総頁数は四八頁で、「論説」「雑



『郷友雑誌』第一号
法量：縦21.5cm, 14.0cm
厚さ0.3cm

録」「文花」「雑報」「会告」の五項目で構成されている。以下、第一号の各項目について紹介する。

「論説」は、「本誌発行の主旨」が冒頭二頁にわたり掲載され、続いて、主に雑誌の発行を祝した投稿記事が掲載されている。主旨には、四つの発行理由と直接または間接的とされた目的が記されており、『宗像』をみていく上で押さえておきたい点であるため、一部省略し、引用する。また、読点は筆者によるものである。

①各自ノ消息ヲ報シ、各地ノ状況ヲ告ケ、兼テ本郡ノ幸福増進ノ道ヲ論シテ本誌ニ掲載シ、以テ親愛ノ情ヲ表ハシ交誼ヲ全フセント欲ス

② 此雑誌ニ於テ、老幼少長各其胸ヲ披キ情ヲ尽シ戒飭シ鞭達シ、以テ老ハ安シシ、少ハ楽ムノ境域ニ進マント欲ス

③ 我郡ハ古来宗像官幣中社ノ鎮坐マシマスヲ以テ中古親王公郷^御ノ下テ祭祀ヲ司リ玉フ例アリシ、故ニヤ民俗徳化ニ風靡シ古ヨリ孝子節婦ノ後世ニ伝フヘキモノ少シトセス、且宗像氏数十世ノ居城ナルヲ以テ一個独立ノ歴史ヲ有ス、此等ノ遺事旧聞ヲ蒐輯セハ故事ノ埋没ヲ拒キ風化ノ萬一二補ヒナシトセス

④ 且夫近世學術ノ探窮日ニ切ニメ之ニ從事スル者山河ヲ跋涉シ湖海ヲ横航シ事物ヲ觀風俗ヲ察シ、兼テ名山ニ攀ヂ大川ニ浮ヒテ浩氣ヲ養フノ徒会員中其数頗ル多キヲ知ル、故ニ此等ノ人々ノ紀事必ス見ルヘキモノアラン、且ツ才藻富膽ノ士ノ文章詩歌ヲ投与セラレハ亦文学上ノ好雑誌タルヲ疑ハス
(目的) 其他本誌ノ直接又ハ間接ノ目的ハ多カルベシト雖モ、要ス

ルニ郷友ノ交誼ヲ厚フシ、智識ヲ交換シ、德行ヲ奨励シ、老幼少長各其責任ヲ尽シ、以テ本郡ノ福利ヲ増進スルニアリ

この四つの発行理由と直接または間接的とされた目的からは、宗像郡出身者らの交流や情報共有によって、宗像郡出身者らの文化的向上を目指すとする様子がうかがえる。

次に、「雑録」は「論説」と同じく投稿記事によって構成されている。しかし、「論説」はコラムのような記事が目立つたのに対し、「雑録」は「井上氏の米国通信」や「東京諸学校案内」、「第一高等中学入学試験問題」など、情報発信を目的とするような記事が目立つ点が特徴である。

「文花」は漢詩や詩文などの作品、「雑報」は時事に関する記事やそれらに対する批評、「会告」は会則、会員姓名、会費の支払い金額、会員消息といった内容が掲載されている。

二、刊行の節目「第五〇号」

第五〇号は、一九〇二（明治三十五）年七月十日に発行された。雑誌名は、『宗像』という雑誌名で発行された。第五〇号の総頁数は二五頁で、「宗像」「雑録」「文苑」「通信」「会員消息」「会告」「広告」の七項目で構成されている。以下、第五〇号の各項目について紹介する。なお、「文苑」は第一号の「文花」に相当するため省略する。

「宗像」は、「総集会談合事項」が冒頭に掲載され、副題として『会員の熟考を促す』と記している。その内容は、『宗像』を発行する宗像会が総集会を開くにあたり、その議事をあらかじめ伝え、

それに加え「総集会談合事項」の著者であり、宗像会の幹事である平田生が現任幹事としての意見を付した内容である。議題としては、「会費未納者の処分」「会誌を年六回発行とするの可否」「在郷者の入会勧誘」「総選挙に関する事」、そして「最後の一議題」と題された五議題が記載されている。これらの議題は「宗像会」の運営ならびに『宗像』の発行について知ることができる貴重な資料であるため、記事の内容を一部引用し、議題の内容をみていく。

まず、「会費未納者の処分」は、会費未納者の多いことを述べ、会費未納に対し、充分に処分を定めなければならないと提言している。そして、「而して一面にはヤレ大に発達せよのヤレ大に拡張せよの立派な注文があるが基礎の定らぬにドンな事やっても駄目だ」とし、「依て私は先づ第一に未納者の処分を定むるが必要と思ふ」と述べている。なお、この記事によると、雑誌の財政は「会費さへ甘く集まれば充分豊かです、外に少しの弱点もない」とのことである。そして、会費未納の問題に対し、平田生は、その対応策として次のことを述べている。要約して紹介する。「本年度分まで払込がないものに対し、端書にて二度催促し、郡地の分は各委員より催促すること。それでも未納の者は、翌年一月の誌上に姓名と未納の号数を掲げて催促すること。さらに未納の場合、その中でも三十二年度即ち三十九号に払込の満たない者を除名すること」。

次に、「会誌を年六回発行とするの可否」は、会誌を年六回発行するという案が前年の総集会から出ていることを議題としている。しかし、前項目で述べた会費未納の問題からすると、「此企は目今行ふべからざるもの」としている。また、寄附によって年六回の発

行をするという案に対しては、「寄附の力によりて事を挙ぐるのは健全なる発達にあらざるは何人も御承知と思ふ」とのことである。

そして、「在郷者の入会勧誘」は、在米の山口彌太郎氏の意見として、まだ宗像会へ入会していない青年らに入会を勧めることは「第一青年のために大なる幸福にしてまた本会の目的に愜^{かな}うものである」とのことと提言された議題である。さらに、入会を勧める労力は郡地委員らに望まなければならないとしながらも、壮年者や老年者にも入会を勧めることで、宗像会の社交的団体の実を挙げたいと述べている。

さらに、「総選挙に関する事」は前項と同じ山口彌太郎、またその他の人物らから、翌月の衆議院議員選挙において、宗像会の本部から代議士を選出することを提言されたものに対して、平田生が自身の意見を述べたものである。そのなかで、「元来本会は純然たる社交的団体である、敢て主義の合するあるにあらず、敢て政見の合するあるにあらず。職業の同じきにあらず嗜好の同じきにあらず。唯同郷人てふ一連鎖により繋がるものである」と記している。したがって、政治的運動をすることは、同郷の社交的団体である宗像会の主旨に合わず、さらに、他団体が政治的手出しをしたことで廃滅した実例が多くあることから、宗像会としては関与しないことが適当であると述べ、この項目を議題として扱うべきでないと主張している。

さいごに、「最後の一議題」は、これまた山口彌太郎から提出されたもので、宗像会の幹事及び地方委員はその任期中、その厚意に謝意を表すために、会費を免除することを提言されたものである。

これに対し、平田生は、自身が幹事であるため意見を挿まず、紹介のみすることであるが、「併し可成収入を減ずる如き思立は暫く見合は然るべきか」と述べている。

以上が、「総集會談合事項」の議題である。この段階では検討されている内容であるが、この五議題をみていくことで、宗像会の運営方針や抱えていた問題を知ることができる。

さて、本項目の冒頭部分に戻るが、項目としての「宗像」は、この議題に続き故人を惜しんだ投稿記事を掲載している。また、「宗像」に続く「雑録」は、二つの書が掲載され、「文苑」をはさみ、「通信」は、地方の知らせ等が掲載されている。続いて「会員消息」「会告」「広告」は基本的に題の通りである。

三．刊行の節目「第一〇〇号」

第一〇〇号は、一九一五（大正四）年十一月九日、『宗像 第一〇〇記念号』として発行された。第一〇〇号の総頁数は二九五頁で『宗像』のなかで最も頁数の多い号である。雑誌の項目は、「宗像」「祝詞」「懷旧録」「雑録」「青年會記事」「文苑」「葉書便り」「通信」「アメリカ便り」「附録」「會員消息」「会告」の一二項目で構成されている。第一〇〇号は頁数の多さに伴い、雑誌の項目も多いが、その内容の多くは、第一〇〇号の発行を祝して寄せられた記事である。以下、第一〇〇号の各項目についてみていく。

第一〇〇号は、宗像会幹部らの顔写真が掲載された後、「宗像」という項目からはじまり、「宗像」貳拾五年史と題された記事が掲載されている。貳拾五年史には、第一〇〇号までの『宗像』に掲載

された内容と発行された時々の幹事や事務局の氏名が掲載されている。続いて、「祝詞」「懷旧録」は第一〇〇号発行を祝した投稿記事、「雑録」は多様な投稿記事や宗像郡の学校教育に関する一覧など内容は様々、「青年会記事」「文苑」「葉書便り」「通信」「アメリカ便り」「附録」「会員消息」「会告」はその題に則した記事が掲載されているが、折々に第一〇〇号発行を祝した投稿記事を確認することができる。なお、「アメリカ便り」は在米の宗像会員らの写真も掲載され、「附録」は、終身会員や郡地委員らの写真も掲載されている。

四、創立五〇年記念号「第一六〇号」

第一六〇号は、一九四一（昭和十六）年一月十五日、宗像会創立五〇年記念号として発行された。第一六〇号の総頁数は一六六頁である。雑誌の項目は、「写真」「宗像」「説苑」「総集會」「通信」「会員消息」「文苑」「報告」「附録」の九項目で構成されている。以下、第一六〇号の各項目について、簡単に紹介する。

「写真」は、海軍中将出光萬兵衛と宗像会幹部らの写真が掲載されている。「宗像」は創立五〇年を祝した投稿記事、「説苑」は投稿記事のなかに、「宗像会五十周年記念事業として」「育英」宗像塾の建設を提唱する」という記事が掲載されている。また、「総集會」は総集會の報告等、「通信」は会員からの便り、「会員消息」「文苑」は題のとおり、「報告」は寄付者の氏名や会則についての報告、「附録」には会員名簿が掲載されている。

五、戦前最後の発行「第一六三号」

第一六三号は、一九四三（昭和十八）年八月一日、「皇軍慰問号」として、戦前最後に発行された。第一六三号の総頁数は五五頁で、項目は、「写真」「宗像」「慰問」「宗像の宮」「各地通信」「本部」「会員消息」「其他」の八項目で構成されている。以下、第一六三号の各項目について、簡単に紹介する。

「写真」は天照大神が宗像三女神に賜った神勅の書、出光佐三の「復興」の揮毫、県会議員中村堅太郎の写真が掲載されている。

「宗像」は詔書等、「慰問」は宗像郡出身の将兵らへ向けた慰問、「宗像の宮」は宗像神社復興計画や復興期成会の設立について、「各地通信」は投稿記事、「本部」は会務報告、「会員消息」は題のとおり、「其他」は文苑が掲載されている。

表1 『宗像』原本所蔵場所一覧（第1～163号）

〈凡例〉

- ・花田CDは宗像考古刊行会の花田勝広氏らが集成した資料を示す。（参考：本稿註1）
 - ・本一覧は花田CDに収録されている「宗像郷友会・宗像・再興宗像の所蔵一覧」と新修宗像市史編さん事務局、時里、三角、渡辺が実施した原本所蔵場所調査の成果を合わせて検討し、まとめたものである。
 - ・発行日は表紙と奥付で数日異なる場合がある。表紙がある場合は表紙の発行日を記し、表紙が欠けている場合は奥付や誌面のなかで記されている発行日を記す。
 - ・頁数は『宗像』の誌面に頁数が振られた頁を数えたもので、広告等の頁数が振られていない頁については、一覧の頁数には含まれない。
- …原本 ○…花田CDに収録されているもの

号数	雑誌名	年	月	日	頁数	宗像大社	宗像高校 四塚会館	カメラア (津屋崎 町史)	花田 CD	備考
1	郷友雑誌	明治 24	11	1	48	—	●		○	
2	郷友雑誌	明治 25	1	1	55	—	●		○	
3	郷友雑誌	明治 25	3	1	63	—	●		○	
4	郷友雑誌	明治 25	5	1	64	—	●		○	
5	郷友雑誌	明治 25	7	14	58	—	●		○	
6	郷友雑誌	明治 25	9	1	34	—	●		○	
7	郷友雑誌	明治 25	11	1	52	—	●		○	1 周年の祝いの記事掲載
8	郷友雑誌	明治 26	—	—	—	—	—	●	欠	
9	郷友雑誌	明治 26	—	—	—	—	—	●	欠	
10	郷友雑誌	明治 26	—	—	—	—	—	●	欠	
11	郷友雑誌	明治 26	—	—	—	—	—	●	欠	
12	郷友雑誌	明治 26	—	—	—	—	—	●	欠	
13	郷友雑誌	明治 26	—	—	—	—	—	●	欠	
14	郷友雑誌	明治 27	1	1	48	—	●		○	
15	郷友雑誌	明治 27	3	1	—	●	—	●	抜粋	
16	郷友雑誌	明治 27	5	1	42	●	●		○	
17	郷友雑誌	明治 27	7	1	34	●	●		○	
18	郷友雑誌	明治 27	9	1	32	●	●		○	
19	郷友雑誌	明治 27	11	1	33	●	●		○	3 周年の祝いの記事掲載
20	郷友雑誌	明治 28	—	—	—	●	—	●	抜粋・表紙欠	
21	郷友雑誌	明治 28	4	15	29	●	●		○	
22	郷友雑誌	明治 28	7	15	35	●	●		○	
23	郷友雑誌	明治 28	10	17	33	●	●		○	
24	郷友雑誌	明治 29	2	7	40	●	●		○	4 周年の祝いの記事掲載
25	郷友雑誌	明治 29	4	25	30	●	●		○	
26	郷友雑誌	明治 29	7	12	32	●	●		○	
27	郷友雑誌	明治 29	10	31	54	●	●		○	5 周年の祝いの記事掲載
28	郷友雑誌	明治 30	1	18	57	●	●		○	
29	郷友雑誌	明治 30	4	28	38	●	●		○	
30	郷友雑誌	明治 30	7	15	32	●	●		○	
31	郷友雑誌	明治 30	10	15	-	●	●	●	欠	
32	郷友雑誌	明治 31	1	15	52	●	●		○	
33	—	—	—	—	—	●	—	●	欠	

号数	雑誌名	年	月	日	頁数	宗像大社	宗像高校 四塚会館	カメラ (津屋崎 町史)	花田 CD	備考
34	—	—	—	—	—	●	—	●	欠	
35	宗像	明治 31	10	15	—	●	—		抜粋	
36	宗像	明治 32	1	15	—	●	—		抜粋・表紙欠	
37	宗像	明治 32	4	10	—	●	—		抜粋・表紙欠	
38	宗像	明治 32	7	10	57	●	—		○	
39	宗像	明治 32	10	10	—	●	●		破損本	8 周年の祝いの 記事掲載
40	宗像	明治 33	1	10	74	●	—		表紙欠	
41	宗像	明治 33	4	10	52	●	●		表紙欠	
42	宗像	明治 33	7	10	48	●	●		○	
43	宗像	明治 33	10	10	42	●	●	●	○	
44	宗像	明治 34	1	10	55	●	●		○	
45	宗像	明治 34	4	10	37	●	●	●	○	
46	宗像	明治 34	7	10	38	●	●		○	
47	宗像	明治 34	10	10	49	●	●	●	○	
48	宗像	明治 35	1	10	91	●	●		○	
49	宗像	明治 35	4	10	48	●	●		○	
50	宗像	明治 35	7	10	25	●	●		○	
51	宗像	明治 35	10	10	46	●	—		○	
52	宗像	明治 36	1	14	58	●	—		○	
53	宗像	明治 36	4	14	39	●	—		○	
54	宗像	明治 36	7	10	29	●	—		○	
55	宗像	明治 36	11	30	59	●	—		○	
56	宗像	明治 37	1	30	37	●	—		○	
57	宗像	明治 37	5	30	30	●	—		○	
58	宗像	明治 37	7	30	24	●	●		○	
59	宗像	明治 37	10	30	40	●	—		○	
60	宗像	明治 38	1	10	45	●	●		○	
61	宗像	明治 38	5	10	46	●	●		○	
62	宗像	明治 38	7	10	16	●	●		○	
63	宗像	明治 38	12	10	46	●	—		○	
64	宗像	明治 39	1	10	37	●	—		○	
65	宗像	明治 39	8	10	24	●	●		○	
66	宗像	明治 39	9	27	36	●	●		○	
67	宗像	明治 39	12	26	31	●	●		○	
68	宗像	明治 40	1	20	29	●	—	●	○	
69	宗像	明治 40	4	28	23	●	●		○	
70	宗像	明治 40	7	10	19	●	●		○	
71	宗像	明治 40	10	25	40	●	—	●	○	
72	宗像	明治 41	1	20	54	●	●		○	
73	宗像	明治 41	4	20	37	●	●		○	
74	宗像	明治 41	7	10	30	●	●		○	
75	宗像	明治 41	10	20	35	●	●		○	
76	宗像	明治 42	1	20	72	●	●		○	
77	宗像	明治 42	4	12	38	●	●		○	
78	宗像	明治 42	7	10	43	●	●		○	
79	宗像	明治 42	10	20	48	●	●		○	

号数	雑誌名	年	月	日	頁数	宗像大社	宗像高校 四塚会館	カメラ (津屋崎 町史)	花田 CD	備考
80	宗像	明治 43	1	10	73	●	●		○	80号記念の祝い記事掲載
81	宗像	明治 43	4	10	56	●	●		○	
82	宗像	明治 43	7	10	33	●	●		○	
83	宗像	明治 43	10	10	40	●	●		○	
84	宗像	明治 44	1	10	58	●	●		○	
85	宗像	明治 44	4	10	52	●	●		○	
86	宗像	明治 44	7	10	75	●	●		○	
87	宗像	明治 44	10	10	77	●	●		○	
88	宗像	明治 45	1	10	69	●	●		○	
89	宗像	明治 45	4	10	74	●	●		○	
90	宗像	明治 45	7	10	82	●	●		○	
91	宗像	大正 1	10	10	85	●	●		○	
92	宗像	大正 2	1	10	66	●	●		○	
93	宗像	大正 2	4	10	94	●	●		○	
94	宗像	大正 2	7	10	76	●	●		○	
95	宗像	大正 2	10	10	82	●	●		○	
96	宗像	大正 3	1	10	86	—	●		○	
97	宗像	大正 3	4	13	90	●	●		○	
98	宗像	大正 3	7	10	96	●	●		○	
99	宗像	大正 3	10	10	82	●	●		○	
100	宗像	大正 4	1	10	295	—	●		表紙欠	100号記念の祝いの記事掲載
101	宗像	大正 4	4	10	56	●	●		○	
102	宗像	大正 4	7	10	64	●	●		○	
103	宗像	大正 4	10	10	80	●	●		○	
104	宗像	大正 5	1	10	63	●	●		○	
105	宗像	大正 5	4	10	68	●	●		○	
106	宗像	大正 5	7	10	41	●	●		○	
107	宗像	大正 5	11	10	80	●	—		○	
108	宗像	大正 6	1	23	68	●	●		○	
109	宗像	大正 6	4	10	60	●	●		○	
110	宗像	大正 6	7	10	51	●	●		○	
111	宗像	大正 6	10	10	76	●	●		○	
112	宗像	大正 7	1	31	94	●	●		○	宗像発展号
113	宗像	大正 7	4	20	58	●	●		○	去華就実号*
114	宗像	大正 7	7	20	56	●	●		○	
115	宗像	大正 7	11	10	57	●	●		○	
116	宗像	大正 8	2	10	50	●	●		○	
117	宗像	大正 8	4	20	45	●	●		○	
118	宗像	大正 8	7	20	45	●	●		○	
119	宗像	大正 8	10	20	61	—	●		○	
120	宗像	大正 9	2	10	59	●	●		○	
121	宗像	—	—	—	—	●	●		欠	
122	宗像	大正 9	7	10	50	●	●		○	
123	宗像	大正 9	10	10	67	●	●		○	
124	宗像	大正 10	1	10	55	—	●		○	

*外見の華やかさを取り去り、内面を充実させ、実際に役立つ人間になるの意。明治四十一年「戊申詔書」の「華ヲ去リ実ニ就ク」という一節に由来する。

号数	雑誌名	年	月	日	頁数	宗像大社	宗像高校 四塚会館	カメリア (津屋崎 町史)	花田 CD	備考
125	宗像	大正 10	5	10	54	—	●		○	
126	宗像	大正 10	7	10	54	●	●		○	
127	宗像	大正 10	11	10	73	●	●		○	
128	宗像	大正 11	2	10	64	●	●		○	
129	宗像	大正 11	5	10	46	●	●		○	
130	宗像	大正 11	7	10	46	●	●		○	
131	宗像	大正 11	11	10	86	●	●		○	
132	宗像	大正 12	2	10	36	●	●		○	
133	宗像	大正 12	4	10	34	—	●		○	
134	宗像	大正 12	12	—	—	—	●		○	
135	宗像	大正 14	8	1	44	●	●		○	
136	宗像	大正 15	4	10	40	—	●		○	
137	宗像	大正 15	8	10	20	—	●		○	
138	宗像	昭和 2	1	1	52	●	●		○	
139	宗像	昭和 2	8	25	21	●	●		○	
140	宗像	昭和 3	1	1	41	●	●		○	
141	宗像	—	—	—	—	●	●		欠	
142	宗像	昭和 6	11	1	64	●	●		○	
143	宗像	昭和 7	7	1	52	●	●		○	
144	宗像	—	—	—	—	●	—	●	欠	
145	宗像	昭和 8	7	10	44	●	●		○	
146	宗像	昭和 12	2	3	88	●	●		○	復刊の祝いの記事掲載
147	宗像	—	—	—	—	●	—		欠	
148	宗像	—	—	—	—	●	—		欠	
149	宗像	—	—	—	—	●	—		欠	
150	宗像	昭和 13	2	23	64	●	●		○	150号記念の祝いの記事掲載
151	宗像	昭和 13	5	28	52	●	●		○	
152	宗像	昭和 13	8	5	94	●	●		○	
153	宗像	—	—	—	—	●	●		○	皇軍慰問特集号
154	宗像	昭和 14	2	25	64	●	●		○	郷土館竣工記念号
155	宗像	昭和 14	5	31	42	●	●		○	
156	宗像	昭和 14	8	25	46	●	●		○	
157	宗像	昭和 14	11	30	56	●	●		○	
158	宗像	昭和 15	3	31	22	●	●		○	
159	宗像	昭和 15	8	1	36	●	●		○	
160	宗像	昭和 16	1	15	166	●	●		○	創立 50 年記念号
161	宗像	昭和 16	6	10	34	●	●		○	
162	宗像	—	—	—	—	●	—		欠	
163	宗像	昭和 18	8	1	55	●	●		○	皇軍慰問号

Ⅲ 戦後の雑誌『宗像』をめぐる

ここでは、『宗像』に関する基礎情報を紹介し(一)、書誌学的な検討を加える(二、及び表2)。その上で、発行の経過を概括する(三、及び表3と表4)。

一、『宗像』に関する基礎情報

『復刊 第1号』から『再興 第十九号』(以下、本稿全体にわたる数字表記ママ)にわたり、各号はいずれも、ほぼA5判の縦書き活版印刷、右側をホチキス留めた平綴じ小冊子である。少なくとも『再興 第二号』以降は上限四〇頁が目処とされたことが、『再興 第二号』四六頁や『再興 第十二号』四七頁の記述からうかがえる。印刷部数に関する記載や資料は未見につき、会員数に関する情報を参考までに記すと、『再興 第一号』掲載の会員名簿には七八六名、『再興 第十八号』別冊の会員名簿には七四三名が記載されている。なお、『再興 第十二号』三五頁には、「公称千名、実質会員七百五十名」との記述がある。

原本所蔵状況をはじめ、『宗像』をめぐるでは幾つかの資料が存在する。新修宗像市史編さん事務局(以下、「市史事務局」と記す)で把握されている資料は次の通りである。

まず、花田勝広らにより作成され、二〇一一年に公開された、『宗像高校四塚会館保存資料(1) 宗像』(以下「資料A」と記す)がある。これは、旧宗像郡内の文化施設に散在する原本の所蔵状況と、原本のデジタルアーカイブを柱とする二次資料で、具体的には、①宗像会とその結成に関わった早川勇の紹介、雑誌『宗像』にまつ

わる解説、②四塚会館はじめ旧宗像郡内文化施設等における現存状況一覧、③創刊号から第一六三号、戦後の『復刊 第1号』と『復刊 第二号』、そして『再興 第一号』から『再興 第十九号』の原本スキャンによるデジタルアーカイブ、④宗像郷土館図書目録・宗像高校古文書図書目録、⑤「集成作業を終えて」(作業にまつわる総括記録)というコンテンツから成るPDFデータである。

このうち、②の現存状況一覧には、「四塚会館」の他、「宗像市図書館」「福岡県立図書館郷土課」「宗像大社」「宗像郡町村会」「津屋崎町史編纂室」における『宗像』の所蔵状況が整理されている。③のデジタルアーカイブは、必ずしも全号全ページを網羅するものではないが、大多数の号で半分以上のページを掲載する資料集である。なお、資料Aの①には、デジタルデータは四塚会館所蔵資料を基本として、欠失「号」は宗像市図書館(宗像大社所蔵本の複写本)や福岡県立図書館郷土課の所蔵資料で補った旨が記されている。

この資料Aに基づく三次資料に、「雑誌『宗像』所在一覧」(以下、「資料B」と記す)が存在する。これは、資料A②に対し、「津屋崎町史編纂」と「宗像市史編さん事務局」に関する調査結果が追記され、津屋崎町史編纂の項のみ「二〇一七年十月確認」との付記があるExcelファイルである。

また、同じく資料Aに基づく三次資料として、市史事務局が作成した所蔵一覧及び目録(以下、「資料C」と記す)のExcelファイルがある。これは、①宗像大社での所蔵一覧、②宗像高校四塚会館での所蔵一覧、③資料Aのデジタルアーカイブと宗像大社および四塚会館の所蔵情報を照合した一覧、④福津市複合文化センターカメ

リアステージでの所蔵一覧、⑤資料Cの③に対しCの④の情報を追記した一覧、⑥創刊号以来の全号に関する記事ジャンル・執筆者・タイトル・ページ数等に関する目録、という各シートから構成されている。

なお、筆者は二〇一七～二〇一九年度にかけて資料Cの作成作業に従事した。

二、戦後刊行分の『宗像』に関する書誌学的検討

本稿執筆に際し、これら資料の記載内容を確認する過程で、現存状況にかかる「号」の存否といったマクロな次元から、デジタルアーカイブにおける頁配列の次元、目録におけるテキストや語句の異同といったミクロな次元、更には資料相互間においても、多くの不備や齟齬の存在が浮上した。そこで、二〇二二年十二月から二〇二三年一月にかけて、所蔵の記載がある、あるいは所蔵可能性が推測される文化施設を訪れ、実地確認と、既存資料の照合検証等を行った。紙数の関係上、直近の原本所蔵実態に焦点をあてて以下に述べる。

(1) 宗像高校四塚会館を訪問し、所蔵実態を確認したところ、資料Aの記載とは異なり、資料Cのとおり、『復刊 第1号』『復刊 第2号』『再興 第1号』『再興 第6号』ならびに『再興 第12号』から『再興 第19号』にかけては所蔵がなく、『再興 第5号』と『再興 第10号』は二部ずつ所蔵されていた。所蔵資料は全ページが欠落なく揃っていた。

(2) 郷土資料を管理する宗像市民図書館深田分館に確認したところ、

ろ、「配架資料（第一～七、十四～六九号）は原本でなく、資料Aの③のデジタルデータをプリントアウトし製本した冊子で、それらの他に資料無し」との旨の回答だった。なお、資料Aによると「宗像市図書館本は宗像大社本の複写」との旨の記述があることから、更に宗像大社にも問い合わせたものの、「原本は無くデジタルデータのみ」との旨の回答だった。

(3) 福岡県立図書館での所蔵状況に関し、資料A及びBには、『再興 第1号』から『再興 第19号』の全てが記載されているのに対し、資料Cでは『再興 第1号』から『再興 第18号』までが記載されている。そこで福岡県立図書館に問い合わせたところ『再興 第1号』から『再興 第19号』は、頁数の欠もなく所蔵されていることが判明した。資料の来歴などについても訊ねたところ、「発行元である宗像会から寄贈されたと思われるが、それ以上に詳細で確かな情報は不明」との旨の回答だった。

(4) 福岡市総合図書館における『宗像』所蔵状況は、表2の通りである。全て郷土コーナーの開架書架に置かれ、一般書籍や地域広報誌等と同様に、一般来館者が随時閲覧・複写できる状態となっていた。

(5) 戦前から宗像会ならびに『宗像』に所縁の深かった出光佐三を柱とする「出光創業史料室」（北九州市門司区、出光美術館内）に電話で問い合わせたところ、「所蔵無し」との旨の回答だった。

(6) 資料A及びCに記載がない資料Bには、『復刊 第三号』が市史事務所に所蔵されているらしき旨の記載があることから、市史事務局に問い合わせたところ、同日中に、市史事務局の所蔵資料の中

に確かに存在する事実が判明した。

三、発行経過の概括

戦時中、第一六三号を以て断絶した『宗像』は、戦後十年を経た一九五五年十二月、宗像会結成準備委員会から編集事務を一任された中野正之らの手で、『宗像 復刊第1号（通巻157号）』として宗像会名義で発行された。次いで一九五六年七月、同じく宗像会名義で『宗像 復刊第二号（通巻158号）』が発行された。さらに、『宗像 復刊第三号（通巻一五九号）』が一九五七年一月に発行された。この『復刊第三号』の表紙は、翁の面が描かれた先行二号と図柄が異なり、折鶴に松竹梅のイラストが配置されている。発行者も「宗像会結成準備委員□発行」と記載されている。²³だが、『宗像』の“復刊”は、ここで、またもや途絶することとなった。

それから七年後の一九六三年九月、改めて『宗像 再興第一号』が宗像会名義で発行された。続けて一九六四年一月、『宗像 再興第二号（通巻162号）』が発行され、以降、再興の各号は、一応は季刊ペースで一九六八年七月の第十九号（通巻179号）まで続刊され、旧宗像郡ゆかりの名士による特別寄稿、郷土史家による連載作品、郷土ゆかりの人物誌や会員消息等を掲載していた（『再興』各号の目次をカテゴリ分類した一覧を表3と表4に示す）。この『再興 宗像』も、第十九号を最後に宗像大社の社報『宗像』に統合された。

表2 戦後の雑誌『宗像』所蔵調査リスト

号数	年	月	日	頁数※1	宗像考古刊行会 デジタルスキャン※2	宗像大社	四塚会館	宗像市民 図書館	海の道 むなかた館	カメラズナージ (コピー本)	県立 図書館	総合 図書館	国立国会 図書館	出光美術館 出光創業史料室	北九州市 立図書館	備考
復刊第1号(通巻157号)	1955(昭和30)	12	1	74	無欠											
復刊第二号(通巻158号)	1956(昭和31)	7	20	55	20～29頁で乱丁あり											
復刊第三号(通巻159号)	1957(昭和32)	1	15	(115)					1冊							
再興第一号	1963(昭和38)	9	20	74	無欠					裏表紙欠	1冊	1冊			1冊*6	
再興第二号(通巻162号)	1964(昭和39)	1	15	48	無欠		1冊				1冊	1冊				
再興第三号(通巻163号)	1964(昭和39)	5	20	49	無欠		1冊				1冊	1冊				
再興第四号(通巻164号)	1964(昭和39)	11	20	31(36)	2～3、16～23、26～27、32頁以降欠		1冊				1冊	1冊				
再興第五号(通巻165号)	1965(昭和40)	2	20	44	無欠		2冊				1冊	1冊				
再興第六号(通巻166号)	1965(昭和40)	5	20	33(36)	2～5、26～29、34頁以降欠				2～5、26～29、34頁以降、裏表紙欠		1冊	1冊				
再興第七号(通巻167号)	1965(昭和40)	8	20	40	表紙～15頁重複あり、38～39頁欠	1冊	1冊				1冊	1冊				
再興第八号(通巻168号)	1965(昭和40)	11	20	40	無欠		1冊				1冊					
再興第九号(通巻169号)	1966(昭和41)	1	20	42	2頁重複(通し番号は順次進む)		1冊				1冊(付録有)	1冊(付録無)				付録配布
再興第十号(通巻170号)	1966(昭和41)	5	20	42	22頁が20頁に置き換わっている(22頁欠)		2冊	*3			1冊	1冊	*4	*5		
再興第十一号(通巻171号)	1966(昭和41)	7	20	44	無欠		1冊				1冊	1冊				
再興第十二号(通巻172号)	1966(昭和41)	10	20	45(46)	8～13、38～39、46頁以降欠				8～13、38～39、46頁以降、裏表紙欠		1冊	1冊				
再興第十三号(通巻173号)	1967(昭和42)	1	20	39(42)	6～11、40頁以降欠				6～11、38頁以降、裏表紙欠		1冊	1冊				
再興第十四号(通巻174号)	1967(昭和42)	4	20	41(44)	6～9、36～37、42頁以降欠	1冊					1冊					
再興第十五号(通巻175号)	1967(昭和42)	8	20	33(36)	6～11、16～17、34頁以降欠				6～9、42頁以降、裏表紙欠		1冊	1冊				
再興第十六号(通巻176号)	1967(昭和42)	10	20	42	34～35頁欠					34～35頁、裏表紙欠	1冊	1冊				
再興第十七号(通巻177号)	1968(昭和43)	1	20	29(32)	30頁以降欠				1冊		1冊	1冊				
再興第十八号(通巻178号)	1968(昭和43)	4	20	57(78)	8～9、58頁以降欠				1冊		1冊	1冊				
再興第十九号(通巻179号)	1968(昭和43)	7	20	23(26)	24頁以降欠				24～37、40頁以降、裏表紙欠		1冊					

*1 宗像考古刊行会デジタルデータで、各号最後に印字されている頁数を記す。()は、追加調査で補充できた頁に印字されている頁数を記す。
 *2 背景色が白の号(159号は除く)のデータの典拠は宗像市図書館本、背景色がグレーの号のデータの典拠は宗像高校本である。
 *3 1～7、14～69号のみあり
 *4 郷友雑誌1・2号のみあり
 *5 電話で確認
 *6 H Pの検索で確認

表3 『復刊 宗像』 目次のカテゴリ分類一覧

復刊第1号			復刊第2号			復刊第3号		
昭和三十年十二月			昭和三十一年七月			昭和三十一年一月		
復刊の言葉		中野正之	巻頭の言葉		吉田	巻頭の言葉		吉田生
随想	宗像旅の雄心を	出光佐三	アメリカを視察して		出光佐三	時代推移に対する所感		永島計七
随想	あの頃のことも	有高雄	観光宗像の建設		麦野時雄	万葉と宗像		森政教
随想	再出版の喜び	赤間文三	故八波則吉師を憶う		大友端立	結婚式は出陣式		高橋昇
随想	元気のいい重鰯の卵はおらぬか	永島計七	上西郷校舎改築			宗像人は素朴さをたたえ		倉田主税
随想	復刊を祝して	出光弘	鎮国寺火渡の行事			随想		生い立ちの記
随想	追憶	宗像塾を復興したい	忘れ得ぬことも		八波千代子	大宗像町の現実とその総合計画		有高雄
随想	宗像塾を復興したい	吉田法晴	ふるさとが生んだ人々		士から生まれたもの			入江英雄
随想	放生会の思い出	倉田主税	文化財を尋ねて		日並文夫	皆んな一緒に		高山徳七郎
随想	なつかしい感激	宗像隆任	世話好き闘士			車窓に見る古里の山河		友枝俊二
随想	双手を挙げて賛成	池浦豊次郎	機補り			老人尊重の気風を振作したい		立石昇
随想	復刊を期して	尾崎善雄	消防団長更迭			三つの要旨		宗像辰美
よみもの	日本の起源は宗像である	筑紫豊	氏貞公の三百七十一歳祭			何かの因縁		小林伊四郎
よみもの	宗像の語源について		農業会議委員			宗像大社随動記		中野正之
よみもの	謎の古文書うわつぷみ		玄海町結婚費調べ			氏子諸士に真を		出光弘
よみもの	宗像の国宝		魚の住い(面白い漁協の計画)			真実の路を求めて		佐伯昌徳
よみもの	宗像の社会体育とレクリエーション	日並文夫	大島の謎		安川弘堂	聞しまれる社長さん		安永濂平氏
ふるさとが生んだ人々	義民お夏ものがたり	上妻国雄	ふるさとをまもる人々			ふるさとが生んだ人々		早川敏平氏
ふるさとが生んだ人々	安永濂平氏		浜宮及び五月祭			ふるさとが生んだ人々		高山登三氏
ふるさとが生んだ人々	石松正鉄氏		宗像の印象		森政教	ふるさとが生んだ人々		松野文三氏
ふるさとが生んだ人々	和田伯士氏		宗像神社春季大祭			海外たより二題		広げてきた赤毛布
ふるさとが生んだ人々	赤間文三氏		宗像郡の人口			海外たより二題		入江英雄
ふるさとが生んだ人々	眉田主税氏		勝浦史談「忍昭和尙外伝」		上妻国雄	一つの提唱！		吉田和三
ふるさとが生んだ人々	権木治郎氏		大阪紀行		中野正之	ふる里の出来ごと		日並文夫
ふるさとが生んだ人々	友枝俊二氏		下総にも宗像神社			聞く大臣奏彰(安部幸兵衛氏)		
町村政治拜見			入江九大教授 国際政村塾学会へ			私の恩赦はない		中野正之
町村長のプロフィール			中央中学茶つき			里沙門天九州総本山		
先輩訪問記	出光弘氏		会員消息(其他)			(勝浦史談) 忍昭和尙外伝		上妻国雄作
報恩母の墓を訪う	花田更生氏		宗像会会則			各地宗像会情報一括報告		
宗像緑風園を訪う						雑報		
故郷のたより								
故郷のたより	田島放生会							
故郷のたより	園芸試験場							
故郷のたより	宮地蘇放生会							
故郷のたより	健康優良児							
故郷のたより	勝浦子ども銀行							
故郷のたより	青年相撲全国優勝							
宗像発起人会								
各地宗像会だより	飯塚会							
各地宗像会だより	県庁会							
各地宗像会だより	遠賀会							
各地宗像会だより	直方会							
会員消息								
編集後記								

表4 『再興 宗像』 目次のカテゴリ分類一覧(4-1)

再興第一号 昭和三十八年九月			
宗像会結成趣意書			
巻頭書	宗像会に寄す		
再興成った宗像会	宗像会々長就任に際して	出光佐三	
再興成った宗像会	前会長のことば	井原元彦	
再興成った宗像会	結成総会の記	高橋盛平	
再興成った宗像会	宗像会の復興結成に至るまで	井上陽之助	
宗像会の再興を祝して	結成を祝す	永島計七	
宗像会の再興を祝して	宗像会の結成を祝す	出光萬兵衛	
宗像会の再興を祝して	再建を祝し過去を思い将来に折る	藤井宏	
宗像会の再興を祝して	機関誌「宗像」の復活を祝う	高橋昇	
宗像会の再興を祝して	復刊「宗像」の発行について	吉田法晴	
宗像会の再興を祝して	宗像誌の創刊を祝して	深田千太郎	
宗像会の再興を祝して	宗像会の使命	久保縄雄	
宗像会の再興を祝して	宗像会の復興を想う	永島寛之助	
随想	科学技術の振興を想う	倉田主税	
随想	祭を興す	小野通夫	
随想	宗像塾の思い出	吉本寿	
随想	おかあさんたちが「宗像会」に期待するもの	大島勝代	
随想	青年期に想う	田島嘉三	
随想	雑感	末次富美子	
随想	愛しあう生活		
随想	原稿募集について		
文苑	宗像地方の文化財 (一)	筑紫豊	
宗像郡のうごき	古記録から見た宗像郡町村の沿革	上妻国雄	
宗像郡のうごき	ベトナム・住宅地として飛躍する宗像町		
宗像郡のうごき	工場誘致と住宅団地で飛躍する津屋崎町		
宗像郡のうごき	観光に躍進する津屋崎町		
宗像郡のうごき	ゴルフ場の竣工と海岸線の整備に夢は大きい玄海町		
宗像郡のうごき	宗像大社の御生祭		
宗像郡のうごき	工場誘致にも乗り出した大島村		
宗像郡のうごき	郡内農協の動き		
宗像郡のうごき	第一回の卒業生を出した宗像大社要学舎		
地方通信	在京宗像部入会の近況		
地方通信	在福宗像入会の近況		
地方通信	大阪宗像会について	天野生	
地方通信	八幡宗像会について	T・V生	
地方通信	戸畑区宗像会の発足に当って	高木茂季	
地方通信	会費納入についてのお断り		
むなかた人物誌	赤間文三氏外		
会員消息	安部郁郎氏外		
会員名簿	顧問		
会員名簿	役員		
会員名簿	会員		
会員名簿	宗像会々則		
会員名簿	あとがき		

再興第二号 昭和三十九年一月				再興第三号 昭和三十九年五月			
巻頭言	年頭所感(*)	井上陽之助		巻頭言	年頭所感(*)	出光佐三	
特別寄稿				特別寄稿			
郷土の先覚者たち	早川勇翁の思い出	深田千太郎		郷土の先覚者たち	早川勇翁の思い出	深田千太郎	
	忘れ得ぬ人 一犬森達先生のことと	永島計七			忘れ得ぬ人 一犬森達先生のことと	永島計七	
	もー				もー		
宗像今昔ものがたり	古記録から見た宗像郡町村の沿革	上妻国雄		宗像今昔ものがたり	古記録から見た宗像郡町村の沿革	上妻国雄	
	勝浦の巻	筑紫豊			勝浦の巻	筑紫豊	
	宗像地方の文化財				宗像地方の文化財		
文苑	宗像よもやま談義	記者座談会		文苑	宗像よもやま談義	記者座談会	
	十八年まえ	森政教			十八年まえ	森政教	
	随筆 城山トッネル	みねのぼる			随筆 城山トッネル	みねのぼる	
	宗像郡曲草界の展望	新海邦男			宗像郡曲草界の展望	新海邦男	
地方通信	在福宗像入会上半期例会	吉本寿		地方通信	在福宗像入会上半期例会	吉本寿	
	戸畑だより	竹内信夫			戸畑だより	竹内信夫	
会員近況	むなかた人物誌			会員近況	むなかた人物誌		
	会員の死を悼む				会員の死を悼む		
	会員消息	会員消息			会員消息	会員消息	
新入会員・会則	新入会員名簿 特別会員 普通会員			新入会員・会則	新入会員名簿 特別会員 普通会員		
会費納入者				会費納入者			
あとがき	あとがき			あとがき	あとがき		

『再興 宗像』 目次のカテゴリ分類一覧(4-3)

再興第七号		再興第八号		再興第九号	
昭和四十年八月		昭和四十年十一月		昭和四十一年一月	
巻頭言	流るる水は清い水	長水	眼	長水	年頭のあいさつ
	福岡学芸大学の構想と展望	坂村敏雄	宗像人の革命	出光佐三	人間尊重と私の長寿法
	昭和にして峻厳	占部貞太郎	鈍頭進学鋭頭在家は如何	高橋昇翁道人	上対馬探訪記
特別寄稿	安永さんを想う	大和藤三郎		西アジアの現状 (一)	和田延弘
	愚兄賢弟	高橋昇			
	酒仙「とつべいさん」を語る—安永渡平翁の足跡—		「朝鮮に林あり」		
郷土の先覚者たち	高武公美氏追憶の記	石橋雅威		産業組合の大先達 真鍋貞太郎	魚住玉輝
				〈俳句〉松離子	
	宗像大宮司 (二)	田中嘉三	宗像大宮司 (三)	田中嘉三	田中嘉三
宗像今昔ものがたり	宗像郡郷土資料 (その四)	松崎武俊	宗像郡郷土資料 (その五)	宗像郡郷土資料 (その六)	松崎武俊
			大島にも河童がいた シアロー (山童) の話	安川寿生	安川寿生
	ふるさと自慢 (二)	安部郁郎	ふるさとの自慢 (三)	安部郁郎	ふるさとの自慢 (一)
文苑	児童作品		福岡の又せー (五)	上妻国雄	福岡の又せー (六)
	福岡の又せー (四)	上妻国雄			
	宗像町現在までの状態		工場と緑の住宅地『福岡町の巻』		生命線は観光と海岸道路の完成 (津屋崎町の巻)
地方通信	植ノ妻会		宗像全門司支部春の一日旅行		
			八年ぶりの小童宗像会の記		
			宗像郡教育研究所の開設		
			学大見学記		
	むなかた人物誌		むなかた人物誌		むなかた人物誌
会員近況	会員消息		会員消息		会員消息
			寸行短信		
新入会員・会則	新入会員名簿 賛助会員 普通会員		新入会員名簿 賛助会員 普通会員		終身会員
					新入会員名簿 賛助会員 普通会員
会費納入者	昭和39年度会費納入者一覧		昭和39年度会費納入者一覧		昭和39年度会費納入者一覧
	昭和40年度会費納入者一覧		昭和40年度会費納入者一覧		昭和40年度会費納入者一覧
あとがき	通に学芸大学を望みて	山下謙	編集後記		あとがき
	編集後記				

『再興 宗像』目次のカテゴリ分類一覧(4-5)

	再興第十三号 昭和四十二年一月		再興第十四号 昭和四十二年四月		再興第十五号 昭和四十二年八月	
巻頭言	年頭のあいさつ	吉田法晴／北九州市長	丹当はいらないか	治郎丸達朗	ハンドバック	上妻国雄
	人生健康でこそ	出光弘	出光丸	石田正実	宗像の地域性とその将来	吉田法晴
	海外どころどころ	楠登	海外どころどころ	楠登	海外どころどころ	楠登
特別寄稿						
郷土の先覚者たち	中村啓二郎氏を憶ふ	故吉田良春	小学校を出ただけで医者になるまで井上市治	井上潔	交通安全実施月間中陣頭に敬華した立石行雄	菊池安右衛門
	中村啓二郎氏を憶うのうしろに	中村研一	夢想もしなかった父の記事掲載によせて		立石君と私	
宗像今昔ものがたり	高市皇子とその子孫三代（二）	田中薫三	高市皇子とその子孫三代（三）	田中薫三	高市皇子とその子孫三代（四）	田中薫三
	宗像郷土資料（十）	松崎武俊	宗像郷土資料（十一）	松崎武俊	宗像郷土資料（十一）	松崎武俊
文苑	ふるさとの正月	石橋雅威／在東京	ボルトガル人の漂着事件	安川淳生	福岡の又せー（十二）	上妻国雄
	福岡の又せー（十）	上妻国雄	古唐津焼松浦佐用姫の像	滝口一直	（民話）身がわりかんのんさま	上妻国雄
			福岡の又せー（十一）	上妻国雄	沖の島探訪記（一）	安部郁郎
					四国石縫山登山記	白木清三
地方通信	伸びる団地減る農家人口、福岡町農協の長期対策		昔農の実態と農協の長期対策（津屋崎町）			
	孝聖武丸正助翁の「親負い人形」博多人形師八嶋与一翁が贈る		五十年振り新築された津屋崎郵便局			
			花田秀文氏急逝さる			
			惜しい人を亡くした			
会員近況			郡教育界の大きな損失	中野貞治		
			伊規須ゆき女史を弔う	立石昇		
			八幡宗像会総会開催さる			
新入会員、会則	寸行短信		寸行短信		寸行短信	
	会員消臭		むなかた人物誌		むなかた人物誌	
	終身会員		終身会員		終身会員	
	新入会員名簿 賛助会員 普通会員		新入会員名簿 賛助会員 普通会員		新入会員名簿 賛助会員 普通会員	
会費納入者	昭和41年度会費納入者名簿		昭和41年度会費納入者名簿		昭和41年度会費納入者名簿	
	昭和42年度会費納入者名簿		昭和42年度会費納入者名		昭和42年度会費納入者名	
あとがき	あとがき		あとがき		あとがき	

『再興 宗像』 目次のカテゴリ分類一覧(4-6)

		再興第十六号 昭和四十二年十月		再興第十七号 昭和四十三年一月	
巻頭言	仕事を愛する	白雲	新年に当って 地味情味 新年吟 宗像に来て	赤間文三／法務大臣 安部清美 魚住王輔 大和正己／教育庁宗像出張所長	
特別寄稿					
郷土の先覚者たち	宮展直系の重鎮 洋画界の鬼才 中村研一 画壇の巨星 藤つ 恩師中村研一先生と私 天然のモザイク勝浦の農地 耕地整理の功労者 花田平太郎 花田平太郎氏を懐う	井上陽之助 熊野礼夫 花田文夫 小島清十	宗像郡役所の生き辞引き郡制創始時代の功労者	友枝豊次郎	
宗像今昔ものがたり	高市皇子とその子孫三代 (五) 日本の夜明けと早川勇 (一) 宗像郷土資料 (十二)	田中壽三 安部重郎 松崎武俊	日本の夜明けと早川勇 (二) 早川勇翁の交友関係を探る 宗像郷土資料 (十三)	安部重郎 立石岸 松崎武俊	
	沖の島探訪記 (三) 福岡の又せー (十三) くまんばちどのたたかい	安部郁郎 上妻国雄 石松豊彦	中津宮と杉田久女 福岡の又せー (十四) 沖の島探訪記 (三)	安川淨生 上妻国雄 安部郁郎	
文苑					
地方通信	玄海町農協と農業 宗像神社勸祭社について懇談会 早川勇先生顕彰会発足す 豊多久に新工場 新新設備誇る門司砕石 森肇一氏をいたむ		大島村農協と農業 恩師力丸健象先生の胸像建立 心あたたまる教え子たちの贈り物		
会員近況	むなかた人物誌 会員消息 寸行短信 終身会員		むなかた人物誌 寸行短信 会員消息 終身会員		
新入会員・会則	新入会員名簿 賛助会員 普通会員		新入会員名簿 賛助会員 普通会員		
会費納入者	昭和42年度会費納入者名簿 昭和43年度会費納入者名		昭和42年度会費納入者名簿 昭和43年度会費納入者名		
あとがき			予告・四月発行明治百年記念号		

『再興 宗像』目次のカテゴリ分類一覧(4-7)

		再興第十八号 昭和四十三年四月		再興第十九号 昭和四十三年七月	
巻頭言					石松豊彦
特別寄稿	明治は遠くなりけり	明治百年に思う	倉田主税	ふるさとの歌	
	明治は遠くなりけり	百年の大計	高橋三ツ半生		
	明治は遠くなりけり	〈回顧〉東郷高等小学及び前の「宗像」誌のことども	有高義		
	明治は遠くなりけり	明治百年とふるさと	白木茅造		
郷土の先覚者たち	黎明期の宗像人	野村望東尼	安川浄生	後半生を地方自治につくした中村堅太郎	
	黎明期の宗像人	日本の夜明けと早川勇 (三)	安部重郎	郡内会員の会費納入の方法が変わりました	
	黎明期の宗像人	年譜	上妻国雄		
	黎明期の宗像人	郡出身最初の海外留学生西郷南洲の知遇をうけた 徳重正雄			
	黎明期の宗像人	宗像出身陸軍の偉材宗像塾の恩人 伊豆凡夫			
	黎明期の宗像人	郡内学校職員定期異動			
	黎明期の宗像人	異境でお運じた出光方兵衛先生	中村次郎平		
宗像今昔ものがたり	宗像百年	大島の漁業史	安川浄生	宗像郷土資料 (十四) 津屋崎浦六人衆資料	松崎武俊
	宗像百年	〈物価の動きと世相・明治、大正、昭和三代の記録〉和田積蔵さんの「家計簿」から	花田文夫	右近の橋と沖之島	安川浄生
	宗像百年	明治から昭和まで米一俵のねだん			
文苑	文苑	六十年前の“田島放生会”	石橋雅成	創作 早川勇 (二)	上妻国雄
	文苑	創作 早川勇 (一)	上妻国雄		
地方通信				故郷はよいもの 郡民あがての赤間法相歓迎会	
				早川勇顕彰碑 旧吉武村役場跡に完成	
				東郷神社の建設準備着々と進む 四千四百坪の地均し工事おわる	
会員近況	会員近況				
	会員計				
新入会員・会則	終身会員			終身会員	
	親入会員名簿 賛助会員 普通会員			寸行短佳	
会費納入者		昭和43年度会費納入者名簿		新入会員名簿 賛助会員 普通会員	
		昭和42年度会費納入者名簿		昭和42年度会費納入者名簿	
		昭和41年度会費納入者名簿		昭和44年度会費納入者名簿	
		宗像会会員名簿		昭和43年度会費納入者名簿	
あとがき		編集後記		会員計	
				あとがき	

おわりに

以上のように、宗像会と『宗像』について、その歴史を明らかにするとともに、書誌的な考察を試みた。筆者は宗像の近代を調べていて、「宗像人」や「神郡宗像」という言葉が根付いているのを初めて知った。こうした言葉は、いつどのようにして誕生したのだろうか。また、強い教育熱や宗像大社への思いを感じることも多い。この郷土雑誌『宗像』が、そうしたことを明らかにする手がかりを提供しているのではないだろうか。この史料紹介が、そのきっかけになることを願っている。

註

- (1) 宗像会と『宗像』については、花田勝広の先行研究(『出光佐三と宗像 宗像人の基層意識』宗像考古刊行会、二〇二〇年)があり、著者も多くの示唆を得た。
- (2) 同前、一三頁。
- (3) 以上、「本誌ノ三週年」(『郷友雑誌』第一九号、一八九四年十一月)。
- (4) 占部玄海『郷土歴史資料叢書第三輯 人物往来 四塚を照らす星雲』羅山房、一九八五年、一〇〇―一〇一頁。
- (5) 以上、『郷友雑誌』第一号、一八九一年十一月。
- (6) 「本誌ノ一大改革」(『郷友雑誌』第一九号、一八九四年十一月)。
- (7) 「本誌の七週年を祝す」(『宗像』第三五号、一八九八年十月)。
- (8) 以上、河邊稔「宗像会規約改正の議」(『宗像』第五五号、一九〇三年十一月)。
- (9) 占部前掲書、二二―二三頁。
- (10) 以上、服部龍二『広田弘毅「悲劇の宰相」の実像』(中央公論新社、二〇〇八年)一四―二三頁、吉田良春「宗像第百号に就きて」

(『宗像』第一〇〇号、一九一五年一月)、石田和吉「宗像塾の今昔」(同前)、吉本寿「宗像塾の思い出」(『宗像』再興第一号、一九六三年九月)。

- (11) 「会則」(『宗像』第八九号、一九二二年四月)、「緊急会告」(『宗像』第一〇七号、一九一六年十一月)。

- (12) 「急告」(『宗像』第二二七号、一九二二年十一月)。

- (13) 以上、伊豆凡夫「東京宗像会本部建設中止意見」(『宗像』第一三四号、一九二三年十二月)、「危路に立つ宗像」(同前)。なお、原本は第三五号になっているが、誤りだと思われるので、訂正している。

- (14) 以上、『宗像』一三五号、一九二五年八月、「会則」(『宗像』第一四二号、一九三一年十一月)。

- (15) 宗像大社復興期成会編『宗像大社昭和造営誌』一九七六年、八六―八七頁。

- (16) 以上、「宗像会々則」(『宗像』第一四六号、一九三七年二月)。

- (17) 以上、前掲『宗像大社昭和造営誌』八六頁、『宗像』第一六三号、一九四三年八月。

- (18) 以上、『宗像』復刊第一・三号、一九五五年十二月・五七年一月。

- (19) 永島計七「宗像会の復興結成に至るまで」(『宗像』再興第一号、一九六三年九月)。

- (20) 「宗像会々則」(同前)。

- (21) 「『宗像』二十年の歩み」(宗像大社広報課、一九八一年)は、第一号(一九六一年一月一日)から第二四〇号(一九八〇年十二月十五日)までを合冊している。なお、宗像大社のホームページで、第一号から現在までの社報『宗像』を見ることができ、二〇一七年四月発行(第六七四号)から題字を『むなかた』とひらがなに変更し、誌面を刷新している。また発行所は「宗像会」が抜け、「宗像大社」のみになっている。

(22) 『宗像』の原本所蔵場所は、宗像考古刊行会の花田勝広氏らによって、宗像市図書館、宗像高校四塚会館、福岡県立図書館郷土課、宗像大社、津屋崎町史編纂室（現福津市複合文化センターカメリアステージ所蔵）を対象に、原本、複写、抜粋のものと分類し、「宗像郷友会・宗像・再興宗像の所蔵一覧」が作成されている。また、宗像高校四塚会館の資料をベースに、福岡県立図書館や宗像大社の所蔵資料で補い、『宗像』をPDF化し、集めた資料が公開されている。

(23) 分担執筆者三角の個人的見解として、次の二つの論点を指摘しておきたい。まず、『宗像 復刊第三号（通巻一五九号）』の表紙について、「委員□」の□部があたかも「会」とみまがうような三角形状に欠落している事実である。これが単に破損によるものか、委員「会」でなく「委員」の独断専行の発刊であることを仄めかす意図的な切除なのかは原本を確認する必要があるが、資料A及びCに記載がない事情等とあわせ、明治二十四年以来的伝統を誇る『宗像』の一貫性に再検討の余地があることを示す物証と考える。次に、一見して明らかな、戦前戦後にまたがって通巻番号が不整合という形式的事実である。二章の内容にふれるため、詳細は別稿を期することとするが、戦時中の用紙統制令や、翼賛的言説をめぐる宗像会内部の軋轢といった内外の背景にも視野を広げるなら、通巻番号問題は、単なる錯誤ではない意図的な附番の結果である可能性を否定できない。すなわち、折々の『宗像』各号の正統性、ひいては代々の宗像会幹部や編集部の正統性をめぐる意識へと連なる問題系が残されているということである。

（ときさとのりあき・わたなべみか・みすみのりこ）

